

歎かぬと、潔くは宣へど、親子一世の憂き別れと、目にもる涙、はらはらはらはら」

家を出て天王寺で暮らす俊徳丸は、「業病」に侵された障害者として人々から嘲笑や憐れみ、嫌悪の対象とされながら生活する。

「子供が大勢手を叩いて、弱法師弱法師と囃すを見れば、目も見えぬ癩病人。辺りの人の咄には、元はよしある人の子なれど、どうでも過去で悪い事、した報ぢやといふ評判。俄盲でよぼよぼよろよろ弱法師、もう見ずおかつしやれ、いちらしい者、穢い物と、口々しやべりそこそこに、教へてこそは行過ぐる」

このような生活も俊徳丸には、「前世の戒業拙くて、かかる難病盲目の、身と成果てしは過去の業因」と認識されていた。俊徳丸を追ってきた婚約者浅香姫が、変貌した姿にそれとわからず、俊徳丸自身に俊徳丸の行方を尋ねた時も、俊徳丸は死んだのだと嘘をついた。それは「かかる病も前世の業、仏の道に入らずんば罪の滅する事あらじと、煩惱の迷ひ晴らさん為、難面くはもてなせし」との思いからだった。

このように『摂州合邦辻』は、様々な場面で繰り返し「癩」が前世の悪行によってかかる「業病」であることを強調するとともに、それ故に家を出て「業」をさらす必要があることを説く。

血のモチーフと「血脈」

継母玉手御前の依頼で、俊徳丸に飲ませる毒薬を調合した医師は、俊徳丸の「癩」は「胎内より受けたる癩病ならず、毒にて発する病なれば」、寅年月日刻限生まれの女の生き血で治ると述べる。「胎内より受けたる癩病」と、「毒にて発する病」の二種類があるという説明は、先に医学書で確認した江戸時代の「癩」医学の考え方と一致する。「胎内より受けたる癩病」は「血脈」による「癩」で、後者の「毒にて発する病」は、ここでは毒薬を指すが、「食毒」にあたる。

医師の説明には、先に見た俊徳丸やその周囲の人々の考える「前世の業」という病気観の入る余地がない。17世紀末の浄瑠璃『弱法師』から明確になる医療の普及は、ここに至って医者病気観を演劇空間に持ち込むまでになる。

寅の年月日刻限生まれの女の生き血が「癩」の妙薬であるという風聞は、この時代にはかなり定着していたらしい。玉手の母親は、寅年月日刻限の揃った子供であることを他言しないという「世の教え」に従って、娘の生まれた日時を世間に秘密にしてきたと述べている。

随筆『天言筆記』は「甲州巨摩郡下田村の百姓、友八三男米蔵儀は、寅の年月日時の生まれにて、癩病の薬に二月十日に殺され、生胆を取られしもかわいそうな事、芝居にも聞かぬいたわしき正説」という「ちらしがき」（1804年）を載せている。実際にこのような話が芝居などを通じて世間に流布していたのだろう。